専門紙・誌４社共同キャンペーン「地域から元気を 地方創生が生み出す未来」

観光経済新聞

東川町の観光は北海道最高峰の旭岳と、その麓に位置する「旭岳温泉」「天人峡温泉」という二つの温泉地が中心。ただ、近年はカフェや木工工房を巡る街の散策も人気という。

旭岳の登山は標高1100㍍の山麓駅から1600㍍の姿見駅を結ぶ「大雪山旭岳ロープウェイ」を利用できる。10分ほどの空の散策だが、特に9月中旬ごろは「日本一早い紅葉」が見られると人気だ。

約3万年前の噴火で形成された柱状節理や、270㍍という北海道一の落差を誇る羽衣の滝が見られる天人峡も人気のスポット。

旭岳温泉、天人峡温泉の二つの温泉地とも北海道内では古い歴史を持つ。源泉掛け流しの良質の湯を日帰り利用もできる宿泊施設で味わえる。

町の北側に位置するキトウシ森林公園は、東京ドーム25個分という広大な敷地にスキー場、ゴルフ場、パークゴルフ場、ゴーカートなど各種のアウトドア施設を持つ。高台にある展望台から碁盤の目のように整った水田や、町を囲む山並みを一望する。現在、リニューアルが進み、新たな温浴施設が近くオープンする予定だ。

町の中心はおいしい天然水を生かしたコーヒーが飲めるカフェや、町の景観にマッチしたおしゃれな店が開を目指している。町では制作費2億5千万円を集められると人気だ。

街中散策の人気高まる

在は約75店舗と倍以上に増えた。さらなる出店計画もあり、2022年中には80店舗を超す見通しという。移住者らが新たに開業している。

これら店舗ではHUC（フック＝東川ユニバーサルカード）と呼ばれるIC式ポイントカードを利用できる。買い物や飲食でポイントがたまるほか、さまざまな特典を用意。町民の約8割が同カードを保有している。

観光客は年間およそ11万人。コロナ禍前のピーク時（約150万人）から減っているが、極端な落ち込みはない。隣接する旭川から訪れる日帰り客は逆に増えたという。

町では現在、北海道のアイヌ文化、地元の「大雪山文化」を次世代に伝えようと、アイヌ文化伝承者、知里幸恵(ちり・ゆきえ)さんをモデルにした映画「カムイのうた」の制作を進めている。撮影は2022年7月に開始。2023年秋の公開を目指している。町では制作費2億5千万円を集めることを目標に、同町では「ひがしかわ株主制度」と呼ぶふるさと納税制度で広く資金を募っている。

町の現状について同町企画総務課企画財政室の柳澤一郎主任は「『人が人を呼ぶ』ことがこの町で起きている。移住者に対して行政だけではなく、住民が親切丁寧にいろいろ相談に乗っている。移住者が次に移住する人に同じことをするという良い連鎖が起きている」と指摘。

「『写真の町宣言』や『椅子の日』の制定など、町はさまざまなチャレンジをしている。全てが成功しているわけではないが、30数年前から地道に取り組んできたことが、今、成果となって表れている。チャレンジすることでまた新たな人とのつながりが生まれてくるのだと思う」。

街中を彩るユニークな木彫りの看板

柳澤氏

専門紙・誌の視点（各社の取材から）

塗料報知

屋根と外壁に推奨色彩

北海道最高峰の旭岳（標高2291㍍）を望む東川町は人口約8500人で、北海道第2の都市である旭川市に隣接する自治体だ。町の活性化のため、さまざまな取り組みを進めて積極的に人を呼び込む施策を続け、この25年間で人口が約2割増加したという。

同町の松岡市郎町長は「日本の国は過疎と過密に二極分解している中、東川町は適度に疎がある『適疎』を目指す」という考えに魅力を感じる。集中しすぎてなく、寂しくもない、そういう空間こそが住民が安心して暮らすことができる〝町〟ということになるのだろう。

こうして着実に「適疎」な町の構築を進め、人口が増えるに従って必要不可欠なのは、移住者の受け皿となる住宅である。町には景観条例「美しい東川の風景を守り育てる条例」があり、この条例に基づく住宅建設が推奨される。

町の中心部にある住宅地「グリーンビレッジ」などでは、住人同士が相互に協力し、安全で安心な居住環境を形成。緑豊かな住宅景観を守り育て、後世に残していくため「東川風住宅設計指針」に基づき、統一感のある美しい街並みが形成されている。また、景観に配慮した住宅建設に対しては、さまざまな支援・補助も用意されている。

このような自然環境と調和する「東川風住宅」実現のために建築の指針が示され、大家具産地の一つである旭川家具のうち、約30%を作っており、町内に約35の事業者があり、デザイン性の高い商品を製造している。

東川町は「写真の町」としても知られる。1985年に〝写真の町宣言〟を行い、写真映りの良いまちづくりとして、さまざまな事業を企画。2014年には〝写真文化首都宣言〟を行い、写真に関するフェスティバル等を多く開催する。「写真の町」にふさわしい環境と景観に配慮した施策を実践している。

大自然のふもとで、住民が快く安心して潤いのある生活ができる。訪問者が美しさを感じ、心が和んで、また来たいと思う風景を持つ「適疎」の地域づくりを目指す東川町。景観形成とその維持について、塗料・塗装、コーティングが貢献していく。

グリーンビレッジ

屋根の形状、住宅周りの工作物・付属物（車庫、物置、塀、オイルタンク、ガスボンベ、エアコン室外機）にも配慮を求めている。

また、東川町の主要産業の一つに「木工」がある。住宅についても外壁の装飾、バルコニーの手すり、玄関ドアなどに木材の使用を推奨。板張りの外壁も薦めている。使用する木材の保護として防腐剤や保護材の塗布によるメンテナンスも挙げている。

ちなみに同町は、日本五壁に町産材を活用、家具もしくは町産のものを採用した。隈研吾建築都市設計事務所以外の3棟の活用も決定、東京、札幌、旭川の企業がサテライトオフィスを開設している。

「『隈研吾&東川町』KAGUデザインコンペ」は、人間と世界の間をつなぎ、従来の家具という概念を拡張した「KAGU」の新たな可能性を追求し、KAGUのある豊かな暮らしと新しいライフスタイルの発信への思いを込め2021年に第1回コンペを実施した。

テライトオフィスだけでなく、町として施設を整備することで、コロナ禍で新たなワークライフバランスのモデルを提示し、都市部と世界の連携や地域資源の利用拡大、町内経済の活性化など、多くのメリットを生むと考えた。

隈研吾建築都市設計事務所がデザインを設計から工事監理を担当監修、4棟とも木造2階建てで153・17平方㍍、ワークデスク12席、ミーティングエリア14席となっている。景観条例に則った外観デザイン、外壁は自然の風景になじむよう周囲の緑よりも派手さを抑えた色（白、グレー、ベージュ、クリーム、茶）としている。

さらに、住宅周りの緑化、屋根の形状、住宅周りの工作物・付属物（車庫、物置、塀、オイルタンク、ガスボンベ、エアコン室外機）にも配慮を求めている。

また、東川町の主要産業の一つに「木工」がある。住宅についても外壁の装飾、バルコニーの手すり、玄関ドアなどに木材の使用を推奨。板張りの外壁も薦めている。使用する木材の保護として防腐剤や保護材の塗布によるメンテナンスも挙げている。

ちなみに同町は、日本五壁に町産材を活用、家具もしくは町産のものを採用した。隈研吾建築都市設計事務所以外の3棟の活用も決定、東京、札幌、旭川の企業がサテライトオフィスを開設している。

「『隈研吾&東川町』KAGUデザインコンペ」は、人間と世界の間をつなぎ、従来の家具という概念を拡張した「KAGU」の新たな可能性を追求し、KAGUのある豊かな暮らしと新しいライフスタイルの発信への思いを込め2021年に第1回コンペを実施した。

大家具産地の一つである旭川家具のうち、約30%を作っており、町内に約35の事業者があり、デザイン性の高い商品を製造している。

東川町は「写真の町」としても知られる。1985年に〝写真の町宣言〟を行い、写真映りの良いまちづくりとして、さまざまな事業を企画。2014年には〝写真文化首都宣言〟を行い、写真に関するフェスティバル等を多く開催する。「写真の町」にふさわしい環境と景観に配慮した施策を実践している。

大自然のふもとで、住民が快く安心して潤いのある生活ができる。訪問者が美しさを感じ、心が和んで、また来たいと思う風景を持つ「適疎」の地域づくりを目指す東川町。景観形成とその維持について、塗料・塗装、コーティングが貢献していく。

ハウジング・トリビューン

隈氏と連携し企業誘致

東川町のさまざまな取り組みの中で、注目されるプロジェクトの一つが建築家の隈研吾氏との連携であろう。

東川町は、写真の町として、また、主要産業の家具・クラフトを通じた地域活性化の取り組みとして、従前から企業や学識経験者、個人との連携を深めてきた。そうした中で出会ったのが隈氏である。隈氏は、隈研吾建築都市設計事務所のサテライトオフィス開設を検討しており、東川町の中心市街地にコンパクトな街並みが形成されていること、旭川空港から近くアクセスが良いこと、また、東川町のこれまでのさまざまなチャレンジを知り、サテライトオフィス開設地として東川町を選んだ。隈氏は都市への集中から、地方への分散という視点を大切にしており、東川町が日本三大家具の一つとも呼ばれる「旭川家具」の産地であることも大きな魅力に映ったようだ。

東川町と隈氏が協議をする中で、町の将来を見据え、両者が連携した取り組みが何かできないかという議論が進んだ。ここから生まれたのが東川町サテライトオフィス「KAGUの家」と「『隈研吾&東川町』KAGUデザインコンペ」である。

「KAGUの家」（上川郡東川町東町1の7）は、町の市街地に4棟からなるサテライトオフィス群を建設するプロジェクト。隈研吾建築都市設計事務所のサテライトオフィス「KAGUの家」と「『隈研吾&東川町』KAGUデザインコンペ」である。

従来の家具という概念を拡張した「KAGU」の新たな可能性を追求し、KAGUのある豊かな暮らしと新しいライフスタイルの発信への思いを込め2021年に第1回コンペを実施した。

「KAGUの家」では、入居する企業間で自然と交流が始まっているという。東川町では「隈研吾建築都市設計事務所はもとより、今後、サテライトオフィスの入居企業などとの連携も深めていきたい」（企画総務課企画財政室・柳澤奨一郎主任）と、人とのつながりの中で町の可能性を広げていきたい考えだ。

サテライトオフィス「KAGUの家」

農村ニュース

新規就農増加へ支援策

かつておいしくないお米の産地といわれていた北海道だが、その様相は近年大きく変化。「ゆめぴりか」をはじめ、「ななつぼし」「ふっくりんこ」など全国的にも「おいしいお米」としてよく知られている。客観的な指標としても日本穀物検定協会が毎年行っている食味ランキングで、北海道産「ゆめぴりか」と「ななつぼし」は12年連続で特Aを獲得。12年連続での獲得はこの2産地品種のみであり、どれだけ高い評価を受けているのかの証左といえる。

こうした北海道においても屈指の米産地が東川町だ。大雪山系のきれいな水と豊かな土壌から米どころとして知られ、JA全中な主婦層などを取り込んだハどが選出した「日本の米づくり百選」に選ばれるなど全国から高い評価を受けている。米どころだけに全耕地面積に占める水稲作付割合は8割を超えており、地域の基幹作物となっている。中でもJAひがしかわは、栽培技術・品質管理・食味値などの基準をクリアした米を「東川米」として「強い産地」づくりに向けた取り組みを進めている。

米を中心に力強い農業が展開されている東川町だが、そこには課題も。その一つが、いかに農業従事者を確保するかだ。

東川町がまとめた第2期道産「ゆめぴりか」と「ななつぼし」は12年連続で特Aを獲得。12年連続での獲得はこの2産地品種のみであり、どれだけ高い評価を受けているのかの証左といえる。

こうした北海道においても屈指の米産地が東川町だ。大雪山系のきれいな水と豊かな土壌から米どころとして知られ、JA全中な主婦層などを取り込んだハどが選出した「日本の米づくり百選」に選ばれるなど全国から高い評価を受けている。米どころだけに全耕地面積に占める水稲作付割合は8割を超えており、地域の基幹作物となっている。中でもJAひがしかわは、栽培技術・品質管理・食味値などの基準をクリアした米を「東川米」として「強い産地」づくりに向けた取り組みをはじめ、「ななつぼし」進めている。

米を中心に力強い農業が展開されている東川町だが、そこには課題も。その一つが、いかに農業従事者を確保するかだ。

東川町がまとめた第2期道産「ゆめぴりか」と「ななつぼし」は12年連続で特Aを獲得。12年連続での獲得はこの2産地品種のみであり、どれだけ高い評価を受けているのかの証左といえる。

こうした北海道においても屈指の米産地が東川町だ。大雪山系のきれいな水と豊かな土壌から米どころとして知られ、JA全中な主婦層などを取り込んだハどが選出した「日本の米づくり百選」に選ばれるなど全国から高い評価を受けている。米どころだけに全耕地面積に占める水稲作付割合は8割を超えており、地域の基幹作物となっている。中でもJAひがしかわは、栽培技術・品質管理・

一方で、実際の新規就農者数は厳しい状況だ。

そうした中、町では、さらなる新規就農者増加に向けて、さまざまな施策を展開している。その一つが3段階の研修制度だ。①繰り返し可能な短期研修（2泊3日・1週間コース）＝町内の宿泊施設に滞在し東川町の農家と一緒に仕事を体験②1年を通した長期研修（6カ月～1年）＝東川町農業振興センターを核として1年を通して農家の仕事を手伝う（一部報償有）③農業従事者を増やしていくか。今後の動向が注目される。

農前であれば、長期研修・実践研修中は民間アパートや町営住宅などの家賃一部補助をはじめ、就農計画の作成サポートなどを、就農後については各種の研修会のほか、農作業受託による実質的な作業単位の拡大促進と貸借による経営規模拡大に資することができるよう融資面での農協と連携した支援などさまざまな支援が用意されている。

人口増が続く東川町でいかに農業従事者を増やしていくか。今後の動向が注目される。

道内屈指の米どころ

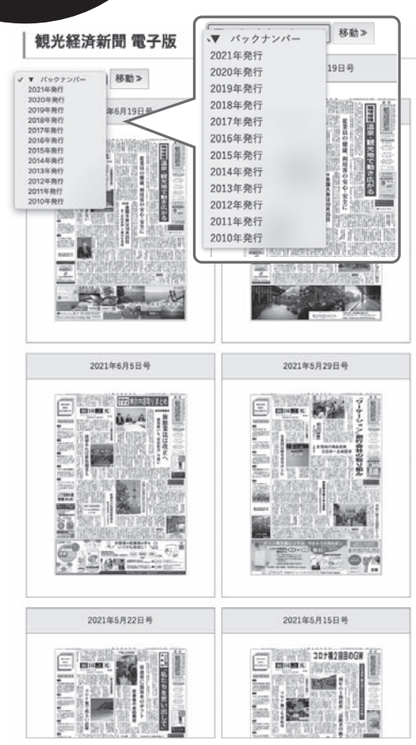
観光経済新聞 電子版 セット割りで 35%お得に！

紙 14,300円 ＋ 電子版 11,000円 ＝25,300円
35% お得
セット割りで 16,500円

お試し 1カ月間無料！

スマホ、PC、タブレットで読める
2010年1月1日号から
最新号が全て読み放題

記事は縦書きと横書きの両方でお読みいただけます。
紙面頁の全面印刷、範囲（スクラップ）印刷ができます。
紙面を画面上で拡大してお読みいただけます。
大手新聞各社と同じ紙面ビューワーを採用しました。



無料会員
0円（無料）
- 観光経済新聞電子版を1カ月間無料でお読みいただけます。
- kankokeizai.com 会員向け記事を1カ月間無料でお読みいただけます。
- 無料購読（試読）の有効期限はご登録から1ヵ月間です。

有料会員
年間 11,000円（税込み）
- 観光経済新聞電子版を1年間お読みいただけます。
- kankokeizai.com 会員向け記事を1年間お読みいただけます。

セット割会員
年間 2,200円（税込み）
- 観光経済新聞電子版を1年間お読みいただけます。
- kankokeizai.com 会員向け記事を1年間お読みいただけます。
- 週刊「観光経済新聞」を郵送で年間購読していただいている方限定の割引プランです。

電子版のお支払いは、各種カード決済（PayPal または Amazon Pay）と銀行振込です。

無料会員登録などの詳細は ▶ https://www.kankokeizai.com/member_plan_list/